

『芸術起業論』

村上隆 著 幻冬舎 1,600円(本体)

いま、世界で、芸術する

会員 出山 剛 (66期)



1 五百羅漢図展

先日、六本木の森美術館を訪問し、本書の著者である芸術家の村上隆氏による「村上隆の五百羅漢図展」を見学してきた。そして、企画展のタイトルにもなっている「五百羅漢図」に圧倒されてしまった。全長100mに及ぶスケールの大きさ、おびただしい数の表情豊かな羅漢たち、ユーモラスかつカラフルな動物ないし神…。圧倒されたまま、ついお土産に絵巻物を買ってしまった次第である。

2 村上隆氏という芸術家

村上隆氏は、現代日本を代表する芸術家であり、日本のアニメやオタク文化をベースとしたポップな作品を得意としている。同氏は国内外で高い評価を得ており、フィギュアが1体1億円で落札される等、同氏の作品は高額で取引されている。その名前を聞いたことのない方でも、若い女性がカラフルな柄をしたルイ・ヴィトンのバッグを持ち歩いている姿を目撃したことがあるのではなかろうか。そのデザインをしているのも同氏である。

私が村上隆氏を知ったのは、図書館で司法試験の勉強をしていた際、勉強の合間に本書を手にとったことによる。本書の表紙には、同氏の顔がアップで掲載されており、なにやら「面白そうな雰囲気」が醸し出されていたのだ。そして、実際に本書は面白く、勉強そっちのけで一気読みしてしまった。

3 本書の内容

村上隆氏は、本書にて、自身の半生を振り返りながら、これまで日本の美術界においてタブー視されていた事柄に対し、気持ちいいくらい颯爽と切り込んでいく。

例えば、同氏は、芸術には金がかかることを正面から認め、芸術家も商売人であると述べ、金銭による芸術

の評価をむしろ万人に分かる価値基準として肯定する。当時、私は、金銭は卑しいものであり芸術と切り離すべしというドグマに犯されていたので、頭を殴られたかのような強い衝撃を受けた。

また、同氏は、芸術の歴史と業界の構造を徹底的に勉強し、現代の欧米の芸術の不文律に「作品を通して世界芸術史での文脈を作ること」があることを見抜いて実践し、「ピカソやウォーホール程度の芸術家の見た風景ならわかる」とまで豪語している。私は、本書を読むまでは、美術館でピカソを見ても意味不明という感想を抱くだけだったが、本書を読んでは現代アートを楽しむことができるようになった（それでも意味不明なことが多いが）。

4 弁護士になって思うこと

私は、現在弁護士3年目を迎えており、おもに不動産や相続といった一般民事の事件に取り組んでいる（芸術に関する事件はほとんどなく、1件だけ高額な絵を購入してしまった方の破産を申し立てたぐらい）。代理人として法的主張を展開して依頼者を支えるという弁護士の業務にやりがいを感じており、一生懸命に取り組んでもいる（つもりである）。ただ、その一方で、弁護士はあくまで代理人であって当事者でないということを痛感させられることもある。例えば、どんなに依頼者に寄り添っても依頼者の負うリスクを肩代わりすることはできないし、依頼者の体験した事実を超えて勝手に物語を作ることすら許されない。そのため、弁護士になってから、逆に、無から有を生み出すことを生業とする職業の方々に対する尊敬の念が増した。そして、芸術家はその最たるものである（起業家もそう）。

とはいえ、私は弁護士である。たまには本書を読み返したり美術館を訪れてエネルギーを貰いながら、今後も依頼者の方々を精一杯支え続けていく所存である。